

②盛岡城

■初代藩主、南部利直の妻

盛岡藩初代藩主が、南部利直（1576-1632）。

外様藩、10万石陸奥盛岡藩は、甲斐の武田氏と始祖を同じくし、脈々と続いた河内源氏義光流の名門だ。

1189年、源頼朝の命令で、平泉（岩手県南西部）の奥州藤原氏を滅ぼし、その功で南部町（青森県三戸郡内）を得て以来、この地を支配し続けた。

南部家は、長い年月のうちに多くの分家を作っておりその中での勢力争いが続いた。

そして、大浦氏（津軽氏）が台頭し、勢力を強めており、侵攻を食い止めることが難しくなっていた。

その時、秀吉からの臣従の申し出があり、取次が前田利家だった。

南部家は、喜んで、臣従に応じた。

そして、1590年、北条征伐に参陣せよとの秀吉からの命令があった。利直は、はせ参じて、秀吉から領地の安堵と後ろ盾を得る。

ここで、南部宗家は、落ち着いた。

ただ、南部家よりいち早く秀吉のもとに駆け付けた大浦氏（津軽氏）の領地が認められ、領土を取られたとの思いも残ったが。

この時、嫡男、利直14歳は、烏帽子親を前田利家とし元服する。その一字を取り名とする。

利家は、秀吉との取次ぎを南部家に利あるように取り計らった、領地を安堵された。

参陣が遅れて、改易された国人領主も数多かった。

利直も、利家を尊敬し、南部一族の誰よりも前田利家に武将としての器の大きさを感じあげられた。

秀吉が決めた結婚相手が、蒲生氏郷の娘（養女）源秀院お武の方（1573-1663）だった。

1591年、奥州の抑えを任せた会津若松藩主、蒲生氏郷と南部家が協力して役目を果たす為に、嫁がせたのだ。

伊達政宗は油断ならない武将だった。伊達政宗を蒲生家と南部家で挟み撃ちし、動きを押さえる為でもある。

こうして結婚するが、南部一族は、大浦氏（津軽氏）に肩入れする秀吉への反発もあり、そこまで秀吉に媚びる必要はないと冷たかった。

気にすることなく、利直は、3歳年上のお武の方を気に入り、大国の姫として恭しく扱い仲睦まじかった。

結婚に伴い、蒲生家・豊臣家に近い家臣が南部家に入る。

秀吉は、大名の妻子は京に住まうように決め、お武の方主従は、京聚楽第、続いて伏見城下の屋敷に住んだ。それでも、国元に行く豊臣系家臣はいた。

朝鮮の役では、利直自ら千名あまりの兵を率いて名護屋城に詰めた。

九州という遠路への出兵は、風土気候等々世の中の広さを、利直に教えた。

利直は、名護屋城で多くの大名と出会い、人脈を広げていく。

利直とお武の方は仲良く、秀吉の威光は増すばかりで、その後ろ盾で南部家も安定し、家中も認めざるを得なくなっていく。

だが、親しくしていた秀次の死・秀吉の衰えを見て、利直も先を見る。

蒲生秀行に家康の娘、振姫が嫁ぎ、利直は、振姫の義兄弟となる。

家康から気軽に呼ばれたりして、家康が近くなる。

そして、秀吉の死。利直は、迷うことなく、家康に臣従する。

お武の方は、京に住まいして動くことはなかったが、子が生まれないうまだった。

年上のお武の方であり、結婚後7年近くなっても、子が生まれないうまを家中が心配する。

また、1595年の蒲生氏郷死後、秀吉が蒲生氏に重きを置かなくなっていた。

1598年、嫡男、忠郷は、会津92万石から宇都宮18万石に国替えとなった。

南部氏と蒲生氏との領地・石高の差は、少なくなった。

すると、利直もお武の方への気遣いが少し薄れていく。

国元で重臣から推された女人が利直に仕え、側室となっていく。

重臣、今瀨政明の娘のお三世の方（-1643）が仕える。

1598年、長男、家直（1598-1613）が生まれる。15歳で亡くなる。

次いで家老、石井伊賀守直弥なほみち（甲州譜代重臣 2500 石）妹、お岩の方（?-1628）が仕える。

1599 年、次男、政直（1599-1624）が生まれる。

後に、政直は信直の身辺警護の役目を持って側近く控え、毒が盛られている事を知りながら父の為に毒見をし 25 歳で死ぬ。

続いて、長女、伊登姫（菊姫）（?-1678）が生まれる。

九戸政実の乱で、功のあった南部一族、北直愛に嫁ぐ（継室）。

続いて、七姫（志知姫）（?-1665）が生まれる。

1611 年、幕府に推され、出羽山形藩 57 万石藩主、最上義俊（1605-1632）と婚約。

そして、嫁ぐも、1622 年、最上家は、改易となり近江大森藩 1 万石となってしまう。

義俊の負担を軽くするために、七姫は、自分の意思で、実家に戻る。

そして、家老 2000 石、中野元慶（元康）と再婚する。

1608 年、4 男、利康（1608-1631）が生まれる。

兄を引き継ぎ、利直の側近くで仕えたが、23 歳で亡くなった。

お岩の方は、利直との間に 4 人の子を産み、実質、国元妻となり南部家の奥を取り仕切る。

利直は、1632 年、利康の早すぎる死を悼んで、絢爛豪華な霊屋（南部町大字小向字正寿）を築く。頼りにしたお気に入りの息子だった。

その前 1628 年、お岩の方が亡くなっており、非業の死となった政直への償いの思いも込めて、冥福を祈りたいと、お霊屋を建立したのだ。

1606 年、お武の方に、重直（1606-1664）が生まれる。

33 歳の高齢出産だった。利直は狂喜して、三男だが、嫡男として徳川幕府に届ける。

後に、陸奥盛岡藩の第 2 代藩主となる。

江戸幕府が始まり、外様大名は豊臣家と繋がる縁を切ろうとした。

だが、振姫の頑張りで蒲生家の再興がなされており、利直は、豊臣恩顧と見なされる蒲生家のお武の方が、南部家にマイナスにはならないはずだと、変わらず仲睦まじくする。

お武の方は正室として伏見屋敷から新しく作られた南部藩江戸桜田屋敷に移り住んでいた。

その後、慈徳院 お松の方（1602-1638）が側室となる。

1616年、5男、重信（花輪重政）（1616-1692）が下閉伊郡花輪（岩手県下閉伊郡）の花輪政友の屋敷で生まれる。後に、三代藩主となる。

ひと時の愛であり、利直の側近く仕えることはなかった。

出合いは、1615年、利直は、甚大な津波被害を受けた沿岸、宮古の様子を見る為に花輪村の花輪内膳政友の屋敷に泊まった時だ。

接待に出た花輪政友の娘、お松の方に、心奪われた。

その為、数日の予定が、一か月近くも泊まってしまふ。そして子が授かった。

源頼朝が奥州を平定した時、功のあった一門、為頼が陸奥国閉伊郡（現岩手県宮古市周辺）を与えられ地頭となった。

以後、閉伊氏を称し、代々この地を治め、分家していく。

その一つが、閉伊郡花輪館（宮古市）に居を定めた花輪氏だった。

利直は、愛するお松の方との子、重信を認知し、以後の暮らしの面倒を見ると同時に、育て方も愛情深く指示した。

お松の方も、すべての愛情を注ぎ、育てる。

花輪氏の菩提寺、華厳院の住職を師に、殿様の子として大切にされつつも、厳しい修練の日々を送る。

華厳院は、閉伊氏の始祖、源為朝の菩提を弔うために、1190年頃、建立された。

以来、閉伊氏（花輪氏）の菩提寺として、名刹となり時を重ねていた。

14歳まで生まれた花輪に住み、15歳になって利直に呼ばれ、盛岡城へと移る。

お松の方は、時折訪れる利直を待つだけだった。盛岡城にも行かなかった。

花輪氏の娘として、つつましく、身分相応の暮らしを続ける。

盛岡城で、法源院、山田氏（?-1657）が側室となる。家臣、山田九郎左衛門の妹。

6男、利長（?-1662）が生まれる。家老家を新たに起こさせる。

続いて、仙寿院、中里氏 (?-1673) が側室となる。

海に面し津波災害の多いこの地への利直の視察があった。

宿泊地となり接待したのが、中里氏。

小笠原氏をはじめとし、岩泉町中里（岩手県下閉伊郡岩泉町）を領した中里氏。南部藩に仕えて 200 石を得ていた。

取るに足らない小禄の武士の家系と見なされた。

数日間の泊りで、自然に結ばれ、1628 年、7 男、直房（1628-1668）の誕生となる。

利直は、我が子とは認めしたが、中里家で育てるようにと命じただけだった。

養育について利直からの指示はなく、養育費が出ただけで、殿さまの子という育てられ方はできなかった。

中里家の養子として、大切に育てられる。

陸奥八戸藩 2 万石初代藩主となる。実家、中里弥次右衛門は家老となる。

もう一人姫 (?-1639) が生まれ、南部一族の遠藤（東）胤政に嫁ぎ、死別後、弟、毛馬内為次に嫁ぐ。

以上が利直の女人との逢瀬であり、お武の方とお岩の方が南部家の奥を支え、他の女人は側室として名を残すものもいるが、当時の南部藩の財政に比べて慎ましい待遇だった。

1599 年、父が亡くなり家督を継いでからの利直は、国元に戻ると、藩主として威厳を振りまき、女人との逢瀬も楽しんだ。

刺激的で楽しい日々だったが、二人を重んじた。

利直は、秀吉の許可を得て、1598 年に盛岡城の築城を始め、翌年、一応出来たと、住まいを移した。

以来、本格的に城と城下町づくりを始め、驚き感心した大坂城・名護屋城をまねた近世城郭づくりに励んだ。

利直の藩政は、白根金山や西道金山などの鉱山開発が順調で、金の採掘が予想以上もあり、資金が潤沢にあった。

その為、盛岡城の築城、城下町づくりから藩主権の確立まで、とんとんと進めることが出来たのだ。こうして、盛岡藩政の基礎を固めていく。

幕府のどのような申し入れにも応じる財力があり、良好な関係を作る。

だが、暗雲も漂い、外様大名として苦悩することもしばしばだった。

1622年、七姫が嫁いだ出羽山形藩57万石藩主、最上義俊(1605-1632)が改易となった。それまでも最上家中に内紛が続き、利直も調停の労を取ろうとしたがうまくいかなかった。最上義俊は、藩主の器なしと見なされ改易だ。

些細な理由を付けての外様つぶしの嵐が巻き起こっており、標的になったのだ。

良縁だと喜んで嫁がせたが、最上家は1万石となり、七姫は戻ってきた。

最上家と一線を引くことで、南部家に影響を受けないようにしたのだ。

それでも、最上家が不憫で、旧臣の幾人かを召し抱えた。

お武の方は、実家、蒲生家への心配が絶えなかった。

蒲生家は、家康の娘、振姫の婿、蒲生秀行が健在な時は良かった。

だが、1612年、秀行死後、振姫が江戸城に戻ると、秀吉恩顧の外様大名であり幼君だと、幕府の厳しい干渉が始まった。

振姫の嫡男である、藩主、忠郷は幕府から派遣された目付や後見人により、がんじがらめになり、思い描いた藩政を執れず苦しみ、1627年、25歳で亡くなる。

この時、幕府は、後継を認めず、会津若松藩を改易の後、弟、忠知に家督引継ぎを認め、石高を減らし松山藩への国替えを命じた。

お武の方と利直は、秀吉と結びついた事で領地を守った恩はあったが、蒲生家への扱いには批判的だった。

それゆえ、秀吉死後、家康の娘、振姫の義姉夫婦として家康に近づき、天下分け目の戦いで家康方東軍として戦い、領地の安堵を得た。

以後も、外様大名ではあったが、幕府の厳しい目もなく、思う存分に藩政に力を注げた。

だが、幕府は、蒲生家に対しては思いもなかった厳しい対応で臨むようになった。

お武の方の実家であり、安泰に続くよう支援したが、内紛は続く。

外様つぶしの標的になっていった。

利直にとってお武の方は、3歳年上の姉的存在であり、秀吉・家康の脅威から守ってくれる盾ともなる存在だった。

京・江戸での緊張する日を、お武の方と共に乗り切った戦友でもあった。

しかも、嫡男に恵まれて、運がいい、良き妻を持ったと感謝した。

そのお武の方の苦悩に何とかしたい思いはあったが、下手に肩入れすれば、南部藩への締め付けが厳しくなる恐れがあった。

1628年、国元での奥を任せていたお岩の方が亡くなる。

深い悲しみに襲われた。

豊臣家が滅ぶのも冷静に見た。

最上家が変わっていくのも冷静に見た。

続いて、蒲生家の悲惨な変遷を見続けるが、お武の方の甥、秀行の子たちは、追い詰められてはいたが、まだ存在しており、時間が解決すると願うしかなかった。

1632年3月14日、将軍秀忠が亡くなる。

その4か月後の7月、熊本藩52万石加藤家が改易された。

将軍家光の権威を示す為の見せしめの改易だった。

熊本藩加藤家は、徳川家康の三女・振姫の娘、琴姫（蒲生秀行の娘・徳川秀忠の養女）の婚家だ。

お武の方の姪が改易されたのだ。

気を落としたお武の方を心配し利直は、重直に言い残した「お武の方の力になるように」と。

1632年10月1日、利直は、56歳。思う存分生きたと、お武の方に感謝し看取られなくなる。

■ 2代藩主、南部重信の妻

重直は、父の死去により26歳で家督を継ぐが、父と同じように多難な引継ぎだった。

父が広げた盛岡藩の壮大な事業の継続完成には、まだまだ多くの費用と時間が必要だった。

祖父、信直・父、信直の事業を継続し、完成させることを藩主の第一の仕事とした。

江戸暮らしが長く、江戸の街並み、発展を見続け、盛岡でも出来ることはまねたいと考える。特に、交通網の整備、街道づくりにこだわり、盛岡城下に向けて、物流の動きが活発になるように考えた。

盛岡城下は、豊富な物資が集まる。そして、人も集まり、にぎやかになり発展していく。

1634年、蒲生忠知が亡くなり、後継なしと見なされ、蒲生家は改易だ。

お武の方の甥の子たち、加藤家も、蒲生家もなくなった。

お武の方は、家光の力を見せる為の外様つぶしだと、あまりにひどいと涙する。

重直は、実家をなくした母の思いが、よくわかった。

そしてまた、妻との関係で同じ悩みを抱える。

重直（1606-1664）の妻は、会津若松40万石藩主、加藤嘉明の娘。

信直は、蒲生家の後に会津若松藩主になった加藤家と親しくすべきだと思い、重直（1606-1664）との結婚を望んだ。

重直も、参勤交代での通り道であり、身近に感じ、大藩でもあるし、良縁だとうれしかった。幕府の了解を得て重直は、1627年と結婚した。

長松（永松）楽姫（?-1654）と二人の子が授かり、仲睦まじく、順調に思えた結婚生活だった。ところが、長松は幼い頃に亡くなる。

結婚して16年後の1643年、嘉明を継いだ明成が、改易された。

それまでも、家中での内紛が聞こえてきて、心配していたが、不安は的中、藩主としての器なしと追い詰められ、自ら退いたとされた。

だが、次弟、明信（監物）・三弟、陸奥二本松3万石藩主、明利家も改易。

兄弟すべてが、改易となった。

明成の子が近江水口1万石藩主で、明利の子たちが旗本として家名を復興するが。

1644年には嘉明の長女は松下重綱（1579-1627）に嫁ぎ、嫡男、長綱が引き継いで、陸奥三春藩3万石藩主だったが、改易。

次女は、池田長政（1575-1607）に嫁ぎ、死別後、公家、日野光慶に嫁いでいた。

嫡男、弘資（1617-1687）がおり娘、後光明院（1633-1654）中納言典侍が生まれた。

後光明院（1633-1654）中納言典侍は、後光明天皇が亡くなると、和子姫に仕えた。公家であり、和子姫が守り、害は及ばず、地位を守る。

末の姫、三女が重直の妻だ。

重直と妻は、明成の兄弟がほとんど改易されたのを受け、南部藩に被害が及ぶのを避ける為に、話し合う。

妻が離縁を申し出、お武の方は大反対したが、離縁を決める。

重直には苦渋の決断だったが、将軍、家光の意向だと判断したのだ。

家光の意向を重視せざるを得ない事情が重直にあったのだ。

その前、1635年の事だ。

重直は30歳になろうとしていた。結婚して、8年、男子は育たなかった。

後継を望む声が重臣に高まり、国元で側室を推される。

そして、八木沢氏お亀の方（?-1636）が側室になる。

南部一門、一戸氏の一族で、閉伊郡八木澤村に住し八木沢氏を名乗っていた重臣の娘だ。

子が授かり、家中大喜びした。

だが、重直は、推されるだけではおさまらず、自らも探す。

そして、七姫から最上氏に縁ある女人の悲劇を聞かされ、興味を持って会う。

屈折した思いを持ちながらも、強さを秘めた美しさに、共通するところを感じ、宇田氏、勝山の方を側室にする。最上奥と呼ばれる。

だが、盛岡城に入れた時が、お亀の方の懐妊時と重なり、二人の間に火花が散った。

南部家臣は、後継は南部家に近い女人から生まれて欲しいと願い、最上奥を嫌った。

最上奥は、家中から冷たい視線で見られる。

重直に愛され、盛岡の人となろうとしていた最上奥は、重直の指示に従わず最上奥を邪険に扱う家中が腹立たしい。

重直は、国元の一族・譜代の臣からの忠誠心を得ておらず、彼らは冷ややかだった。

お亀の方は出産時、苦痛に顔をゆがめたまま、子ともに亡くなる。

家中は、最上奥^{もがみおく}が呪い殺したのだと噂する。

最上奥^{もがみおく}は「私は、ただ殿のお子を授かりたいだけ。いわれなき罪を擦り付けられては我慢できない」と家臣への罰を願う。

重直は、ようやく授かった子が、男子だったと知り、母子共の死に衝撃を受けていた。

家中の最上奥^{もがみおく}への非難に心動かされるころもあった。

こうして、家中は紛糾した。

国元での調整に手間取り、心労もかさみ、体調崩して、1636年の参勤日時に遅れてしまう。

参勤交代は、大名が幕府への忠誠心を示す、第一の行事であり、重要なことだった。

家光は怒った。

また、家光は、新将軍として大きな決断、加藤家・蒲生家の改易を行い、緊張しつつ様子見の時だった。

両家に大きく関与している南部重直の動向に注視していた。

重直も、幕府の裁定に納得しておらず、登城が遅れたのでもある。

家光は、重直は裏切ったと怒り、改易も辞さずと、逼塞^{ひっそく}（門を閉ざし昼間の出入りは許されない）を命じた。

だが、重直は、藩主としての能力もあり、治世も順調であり、家中に不和はあるが内紛とまでは言えない。

やむなく、逼塞^{ひっそく}期間が過ぎると遠慮（自宅での謹慎）処分とした。

そこに、1641年1月、江戸京橋桶町で出火、大火となり、死者数百人の大惨事だった。

重直は、謹慎中だったが、家臣団を引き連れて消火活動の先頭に立ち、見事な働きをする。

ここで謹慎は解け、南部藩の名誉は回復した。

これだけで収まる重直ではなく、大都市での密集した木造の住まいゆえの火災の危険性を実感し、消防のあるべき姿を研究する。

すると、1657年、本郷丸山の本妙寺から出火し、死者は10万人を超える大火となる。世に「振袖火事」と呼ばれる、大火災だ。重直の消防の知識を実践する時が来たのだ。またも家臣団を引き連れ、自ら先頭に立ち、類焼を防ぐ為に大活躍する。将軍、家綱は、重直を呼び、直々に褒めた。ここから、南部藩は、幕府に忠誠を誓う雄藩と認められ、良い関係となる。

この間、隆高院お陽の方(?-1679)が側室になる。家臣、岸本右衛門の娘だ。子は授からなかった。続いて、奥女中、吉田氏が側室になる。家臣、吉田氏の娘だ。1644年、吉松(1644-1652)が生まれる。8歳で亡くなるが。

1644年、嫡男が生まれると、妻と離縁。家光の勘気をことうむっており、加藤家の改易での連座を避ける為、無念だったが、離縁した。妻は娘を連れて、加藤家旧臣を頼り去った。重直は、生涯経済的援助を続けた。

それでも、七姫が引き連れた最上家の旧臣に加えて、改易された加藤家・蒲生家の旧臣を召し抱えようとするが、一族譜代の臣の猛烈な反対にあう。重直も生まれつきの御曹司、なるべくしてなった藩主として黙ってはいない。母、お武の方の為にも、引くに引けなかった。父には従ったのに、重直に従わない譜代の臣を、役職から排除したり、追放したりと過酷な制裁をした。激しい、一本気な性格だった。

江戸で生まれ育った重直には、国元の家臣との交流の機会が少なく、意思の疎通が難しいところがあった。厳しい家中の反発を強権で押し切ったが、幕府の意向が気になる。

すると、1651年、家光が亡くなり、将軍、家綱(1641-1680)の時代となる。ここで、家光の呪縛から解かれた。

1652年、吉松が亡くなり、男子はいなくなった。

後継者をだれにすべきか迷うが、家綱との関係が改善されたことが救いだった。

そこで、家綱の側近、堀田正俊（1634-1684）に後継者問題を相談する。

そして、1659年、堀田正盛の子、勝直（1642-1659）を養子に迎え後継とすると決めた。

ところが決めて間もなく、勝直は亡くなる。

南部藩の未来を予測するような死に、恐れ、どうすればよいか悩む。

そんな時、貞心院お蘭の方を側室にする。本館甚右衛門慶記（慶起）（1630-1701）の妹だ。

^{ひえぬま}稗貫氏が始祖で、^{ひえぬま}陸奥国稗貫郡（花巻市）を支配した国人領主だった。

源頼朝の奥州藤原氏攻めでの功によりこの地を与えられ、^{ひえぬま}稗貫氏を名乗り続いた名門だ。

だが、秀吉の北条征伐に家臣を派遣しただけで当主、^{ひえぬま}稗貫広忠は動かず、不忠者と改易されてしまう。

一族は、離散するが、南部藩に召し抱えられた者もいた。

^{ひえぬま}稗貫広忠は、故郷で隠棲し、嫡男、重政に^{ひえぬま}稗貫家の再興を託す。

重政は長女の婿に、南部家に仕えている一門の瀬川家から本館甚右衛門慶記（慶起）を迎え、跡取りとした。

そして、才媛の誉れ高い自慢の美女、次女、貞心院お蘭の方（?-1690）に家名再興を託し、重直との目通りを実現させ、仕えさせた。

願い通り、重直との間に、吹姫（布岐姫）（1662-1667）が生まれたが、男子は生まれなかった。家名再興を願ったが、実らなかった。それでも、本館家・瀬川家は家臣として続く。

ここで、重直は我が子をあきらめる。

すると、弟から選ぶいかない。

国元に戻った時に会うだけだが、後継にしてもよいと思える優秀な弟たちだった。

弟で生きているのは、1616年生まれの花輪重信（1616-1692）

山田利長（?-1662）。子は八戸氏を継ぎ家老となる

1628年生まれの中里直房（1628-1668）

の3人だった。

重信は父のお気に入りの子だった。七戸城を預けられているし、後継にふさわしい。

だが、直房は父の子としては恵まれない境遇で、同情するところがあった。重信によく尽くし、分家を起こさせたかった。

1662年、利長が亡くなり、弟は二人となった。

堀田正俊ら幕閣と協議を重ねる。

家光から嫌われた、蒲生家・加藤家に繋がる外様大名としての南部家の生き残りは、新たに将軍より藩を与えられることが最良だとまとまっていた。

家中は、花輪重信を後継にすべきだとまとまっていた。

そこで、重直は、死後、南部家を将軍、家綱に返上し、新たに将軍の裁定として、盛岡藩8万石を重信に、直房に2万石で立藩させることで、将軍、家綱の了解を得た。

直房の生きる道を与えたかったのだ。

準備を整え、1664年、重直は死ぬ。

こうして、本藩8万石を重信が、直房が分家し八戸藩2万石で立藩した。

一度、お家を断絶させたのち、幕府から新たに重信が藩主と認められる。それは成功した。

こうして、南部家中が待ち望んだ、国元で育った質実剛健な殿さまが誕生する。

重信は、出来上がった盛岡の町を活性化させ城下町として繁栄させる、名君としての逸話が数多く生まれる。

重直は、滅亡した近江から出た蒲生家の血を受け継ぎ江戸で生まれ育った、南部家に似合わない藩主だった。

江戸の物流街並みを盛岡でも実現し繁栄させようと考え、江戸育ちだが江戸と張り合う心意気があった。

それでも都会の洗練された知識をひけらかせ、国元を軽く扱うように思われた。

南部家を危険な状態に陥らせた、最上家・蒲生家・加藤家を大藩であり、南部家の上であるかのように大切にし、旧臣を高禄で召し抱えようとしたとも思われた。

一本気で強硬に押し切ろうとする暴君ではあったが、弱者に対して思いやりがあり、正義の味方を気取る優しい藩主だったのだが。

重直は、蒲生家の誇りと意地を持ち続けた母、お武の方と歩んだ人生でもあった。
母の死の一年後、自分の策は必ずうまくいくと確信して、母の元に旅立つ。